

# 天理教のご案内



天理教は、江戸時代の天保9年(1838年)、教祖・中山みきによって始められました。天理教は、世界中のすべての人々が、親神様に守られ生かされて、仲睦まじくたすけ合う「陽気ぐらし」世界の実現を目指しています。

本資料では、天理教の概要をはじめとし、死生観、葬儀、年祭、お墓や納骨堂などについての情報をご紹介します。

# 天理教の概要

## 親神様

天理教信仰の中心は、親神・天理王命(おやがみ・てんりおうのみこと)です。人間創造の地点と教えられる聖地「ぢば」は奈良県天理市に位置し、天理教教会本部の神殿と礼拝場はこの「ぢば」を取り囲むように建てられています。

## 教祖

江戸時代の天保9年(1838年)、教祖・中山みきによって始められました。現在、日本国内を中心に約1万4千の教会があり、信者数は120万人を数え、その教えは海外80カ国に広がっています。

## 教え

親神・天理王命は、人間が互いにたすけ合う「陽気ぐらし」の姿を見て共に楽しみたいとの思いから、人間と自然界を創り、絶え間なく守り育ててきました。「親」として温かく抱きしめ、教え導いています。

# 天理教の死生観

## ～出直し～

天理教では、人の死を「出直し」といいます。親神様からの「かりもの」である身体をお返しすることを指します。

出直しの語は元来、「最初からもう一度やり直すこと」を意味することからも察せられるように、死は**再生の契機**であり、それぞれの魂に応じて、また新しい身体を借りてこの世に帰ってくる「生まれ替わり」のための出発点なのです。

前生までの“心の道”であるいんねんを刻んだ魂は、新しい身体を借りて蘇り、今生の心づかいによる変容を受け、「出直し」「生まれ替わり」を経て、また来生へと生まれ出ます。



# 天理教の葬儀の概要

## 1 みたまうつし

一般的にいう通夜のことを天理教では「みたまうつし」と呼びます。故人の遺骸から御霊(みたま)を霊璽(れいじ)に移し、仮のお社におさめます。

## 2 告別式

身体は親神様からの「かりもの」です。教祖は「古い着物を脱いで、新しい着物と着かえるようなものやで」と仰せくださいました。故人の生前の遺徳を偲び、遺骸とのお別れをします。

## 3 五十日祭・合祀祭

葬儀から五十日を目安に五十日祭をつとめます。それまでの期間は、仮のお社におさめた御霊を遺族の家などでお祀りします。その後、霊舎(みたまや)または所属教会の祖霊殿に故人の御霊を合祀する合祀祭をつとめます。

## 4 納骨祭・年祭

五十日祭にあわせて御遺骨をお墓や納骨堂などにおさめる納骨祭をつとめられることが多いです。故人の出直しから、一年祭、五年祭、十年祭、その後は10年ごとに五十年祭までつとめます。

### ご注意

上記はあくまで一般的な天理教の葬儀の流れです。土地とところによって、また教会によってその流れや祭式に違いがありますので、詳しくは所属教会長にお尋ねください。

## よくある質問①



**Q: 天理教の葬儀に参列する際の服装は?**

**A: 仏教や神道と同様の喪服で問題ありません。数珠は不要です。一般的な礼服であれば、天理教の葬儀にふさわしい装いとなります。**

**Q: 香典の表書きはどうすればよいですか?**

**A: 「玉串料」または「御霊前」と書きます。「ご仏前」は使いません。天理教では仏教とは異なる表現を用いますので、ご注意ください。**

## よくある質問②

**Q: 通夜の「みたまうつし」とは何ですか？**

**A: 故人の魂を体から移し、神様のもとへ返す儀式で、天理教独特の通夜です。一般的な通夜とは異なる、天理教ならではの大切な儀式となります。**

**Q: 葬儀の相談はどこにすればよいですか？**

**A: 天理教の教会にご相談ください。お寺や神社では対応が難しい場合があります。所属教会、または最寄りの天理教教会にお気軽にお問い合わせください。**



# まとめとご案内

## 「陽気ぐらし」を目指す宗教

天理教は、死を「出直し」として捉え、すべての人々が親神様に守られ、互いにたすけ合う「陽気ぐらし」の世界を目指しています。

## 独自の儀式とマナー

葬儀には「みたまうつし」をはじめとする独自の儀式があり、服装や香典の表書きなど、天理教ならではのマナーがあります。

## 教会への相談が大切

ご不明点はお気軽に天理教教会までお問い合わせください。土地や教会によって違いがありますので、所属教会長に相談することをお勧めします。

